又頃日の会に

　手造りの酒にいさめる神なれハ

有心にて附は

　聟の朝寐に老のぬき足

此句手造の酒にいさめる神なれハといふ処に心を付て見るに神主也朝の内に神酒なと備へて拝して仕廻ふ聟なとハ家に来て朝寐して居るを目の覚ぬやふ（ママ）に枕のあたりぬき足して歩行体を附たる也されとも差合有て此句なら須然らは是に附句外になし唯一句なれハ例の逃句也

　鏡にはれて通類村雨

神の字と鏡とにらませて逃る也」25ウ

（以下次号）

の法事頼む人と見たる空撓の附合也此句なと
にて考へ志るへし

七名有心

此案方はおもき案方故一巻に数をせ須十論に
も凡二十句には及ふさらんといふは百韻に有心の
句二十句程也其外ハ会釈也有心ハ一句おもく成ゆへ
也我家に第一の案方なるへし此外　立起情向附
なとは集のもやうにて常に用る事にあら須向附も
大名に老僧を以向ふも皆有心の別名也有心といふハ
前句に能附たる地の句にして人論のさま也慥に前句
を見出し是にこれときハめて一句に一句より外
ハなき物也何方何方へも附ハ徒かぬと志るへし

朔日は見る十徳のうしろ影

といへる句あ里此句に何やらん一句徒けて其夜ハ
過し侍る明日琴左曰此附句によき趣向あり勘
当の子と見出したれと我事を我と云事の句作
なら須□ぬと云廬師云其勘当の子に相手をこし
らへていはすへし惣体人論の句に我事をいふ
句ハ相手をこしらへ祢はいはれぬ物也此句なと勘
当の趣向なれハ勘当の字を出しては面白から須

不孝の罪を女房に泣

と志たらハ志かるへしと申されし評曰前句十徳のうし
ろ影ハ誰人と見類に我友にあら須医者に非す
殊に朔日は見るといへハ是に気を徒けて勘当の
子と趣向をきハめ斯附たる也十徳着たる人を附

23ウ

24オ

るは理屈なり見るものを付るに自分の勘当を
自分にはいはれさる故に相手をこしらへて前句の
意を見ぬきて附たる也

出買の腰に鉾一本

此句の木憐見出して落婦れと見立

心から甥の女房にさま付て

又云有心二句の姿の論に

彼岸も山の鐘ハ志つかさ

畑打に問へハ木幡も近一里

此処有心の場と有し時

平家の運を神〳〵に泣

といふ句出けれハ廬師云神といふ字の会釈とさる
事なから此人を平家落と見るハ面白から須常の女
と見て畑打に問ふて木幡も一里にちかしと聞亭
悦ふ人は欠落と見てよし常の女にて一句致たるハ

御主の恋を乳母の立影

といふ句も打趣に彼岸あれハ立影悪し故に走り
ものと見て附たりとかく爰は脇から云たる句は
有心になら須自分云たるならてハ有心とハいは須是に
有心の句ハ只一句ならてハなし此処初心のならぬ処也

男きらひは神もとかめ須

是にて有心の句也男を嫌ひ欠落して畑打に
木幡を問し人也其人の自らいふたる句也其内に畑打
のなふ類体まてこもりて甚面白し爰を有心といふ
也木幡に神は会釈也神は無用の用にもちいたる也

24ウ

25オ

といふ句出たれとも是ハ人に始て呼れて盗人と云
第三はいかゝとおもひ返して
乗物に飽日ハ下駄に杖突て
といふ句に直したりはるかにおとりたれとも其日の
時宜なれハよき句も捨る事あり
時分
時分ハ晦朝昼夜より明暮明暗の沙汰也
時節
時節とは春夏炑冬より節句正月の行支也
天相
天相とは風雨寒暖より多くハ逃句の模様也
面影
面影とは源氏狭衣なと軍書物語の様を作也
観相
観相と句毎の変にして哀楽はまして一座を
志つむる時の附かたなれハ一座に一句か二句か有へし
又曰右八体の外に空撓といへる附かた有て古今抄に
くわしく論有されとも古今抄の證句ハ起情方ならん
か頃目の巻に
雨風も此追風に吹わかれ
頼んた神に嘘ハ有まひ(ママ)
桃の首途に
餅くはぬ旅人はなし桃の花
摺鉢の思に千里鶯
山〳〵も明日ハと衣ぬきかへて

21ウ

22オ

是迄延句徒ゝきたるゆへ此次ちゝめて
備後表に徒くはふて居る
此次も人也
なふれて居て小間物を売合点
打越に場あ里人有逃句ちゝミ句ともに成かたく
其くは里むつかし爰を空撓の附かたにして
都は何処へうつらふとまゝ
延句前に徒ゝきしゆへ逃句なら須其句ちゝミ句
故其場其人なら須さらハ空撓の句よからんとて小間
物売に都の一字をもつて一句を作里たる也空撓
の句ハいつくへ附たるといふ事なく自然と付たる句也
又云空撓といふは先は徒かぬ句也されと百句か百句
附ぬ句をするといふにはあら須百韻が集俳諧には
此処ハともやふ(ママ)にする事も有り
駕籠に三里の道いそく也
傾城の身に奇特なる弐歩の布施
東花坊曰此前句三里先へ行ての句か又行かぬ内の
句かと問れし時廬元日往て先の句也と申され
けれハ東華坊ハ往さる内の句也と申されしよし
三里往ての句なれハ空撓にて徒く也往かぬ内なれ
ハ附か須夫故論におよふ其翌朝廬元前句を
駕籠に三里の飯志いる也
と志たらハ三里往て三里戻る駕籠とミゆへしと
申されけれハいとよし夫ならハ寺なとへ往て親類

22ウ

23オ

附句は趣向を案してこしらへ扨附かたを案る也
夫故七名案し方八体附かたあ類也月華の句は
趣向を案すへから須月花か別趣向也されハ連哥
なとにいふ月花賞翫ゆへ外の趣向を求め須といふ
にはあら須月花を席に其句を延す也されハ一巻
に延ひを付る為なり

七名八体

附方八体　其人　其場　時宜　時節　時分　天相
観相　面影
案方七方　有心　会釈　逃句　向附　拍子　色立
起情
右は我家の条目にして諸抄に出たり抑附方を先と
して案し方ハ後とすへし案方附かたハ別也
案方七名は一巻の配里なれハ其運ひによつて工夫
すへし
又附方は一句に八体附くもの也案方ハ一句に七名
ハならぬもの也夫は案方一巻の運ひによるゆへ也
又七名八体ハ料理の献立に等しくよく配里を定る
条目なれハ其運ひの変しかたゝ二三句のわたりなと
の殊にむつかしき時は七名八体を考て附る事にして
案方附方ハ変化の為也と心得へし

八体其人

其人とは前句の貴賤老少より衣服貧福を見
て其人を附る事也

19ウ

其場

20オ

其場とは前句の夷路山海よ里家内家外の運ひ
を見分て其場を徒け類事也

時宜

時宜とは時に宜しく附たる物也と覚へたる人多し
時に宜く附ぬ句ハなし是を八体の一名にして時宜
にしたるは趣定斗の事にて一句の名にハあら須
志からハ其世に其人の風俗も其座に其日のもやうとて
も一座一興の附合に少しも此時宜のはなるゝ事ハ
なし式ハ四句目の軽き月前なんとたとへは
能趣向ありともよき句ありとも其句にて月花にさゝ
ハル事あらハ何となき句をして次の句の附よきやうに
する事是にて一理万通なり指徒かへさるやうに一巻
の変を見合すへしされハ一座の時宜なれハ一巻のみ
なら須句毎にも押わたりて此一法は有へし
尚口伝

小遣ひの銭も自由に留主の
此附句案す流時手代か下人かなと句作る時ハ盗人の
附合なるへし前句の見様悪し高位なとの前にて
別て有へから須此前句ハ亭主の留主して居類
女房と見て

元服しても母にあまへる
斯あらハ親子の間に盗人の難は逃るへし是等を
時宜の一法とハ志るへし又はしめて或亭へ行て会
有時
盗人の見舞に垣の穴見せて　　蓮二

20ウ

21オ

今式の哥仙行には初折の七句目にて月をして
二花二月にすへき事貞享式の一条なり又月の句
前句より移りの事心得有へし北方にての巻に
　節句なれハと祝ふはり物
といふ句若宵節句名月なとを案したる時此句は
朝の句也朝の附合有るへしされと節句に朝の月なけれ
ハ九月節句と見て
　月は宵菊は朝へ行われて
斯付へし節句斗にて心附たる時ハ宵月なれとも
前句の姿は朝のもやう也
　嘘徒ひて返る霏の俄ふり
　淡路絵しまもちかひ（ママ）窓先
此次月の句也霰の景色より月のむつかしけれは
衆評省て斯付たる也廬師旅留主の巻ニ
　砧うつ手もとに月のほしひまて
時雨庵短哥行名残の裏の五句目に
　綿ぬきの空も次第に軽ふ也
　入札落て山か手に入る
此次月の句なれハ綿ぬきの空にさゝハ里てくはり
悪し故に月の座に華を出す
　約束のうとんも花にのはしおき
　半造作に庫裏の春寒
其頃名残の裏うつりに
　水音もそこに聞（ママ）へて朧月
斯のことく花月をくはりたる是も一座の遊ひと

17オ　17ウ　18オ

と志（ママ）るへし
又月花の結ひ句は一折の内月華二つの内ぬけさる
処にてすへし其折に月の花のなき時ハいかゝ
又匂ひの花とは花の句と発句との作者同人なれハ
匂ひ花也同作ならぬハ挨拶の花といふへし
又大坂にて追善の花に匂ひの花の前句に
　移家いわふけふは朔日
　明暮に云出す花の果報人
又花に趣向ある句
　小座敷闇き雨の行燈
　養生に花の都も居あきて
又季移りの華といふ事ハ猿蓑集に
　何を見るにも露はかり也
　花とちる身は西念の衣着て
又花前に夜分の句用捨すへし
又花をこほすといふ事も有へし其はこひ配りの
むつかしき時はこほれ月のさハきのことく華をこほ
すへしこほれ月のことは古今抄に委　出たり
又花の次挙句へ花の字を置事有へし重ね字
の扱ひ也尤曲節のもやうにして好む事には非須
又発句脇第三に花有時は初の花の座ハ梅桜の類
にてすへし会釈也月の座論なし又□色の花と
ハ花の比興也心の花とても□色也是ハ古式の一つ
を挙て立る也花といふは何処から出るといふミな
□色也外の花も皆□色也比興の花にをなし

18ウ　19オ

干鰯の縄に浜の一ト雨

形のことく宿のきたなきさまの津ゝきたれは第三ハ奇麗に転して

我こゝろ岩に清水と整えて

又

朝臾や宵の紙燭のとほしかけ

月吹わたる小御門の鐘

斯のことくなる上品なるを一転して

ゑゝ帯に替た薗取化られて

是等にて心得へし

第三の字留こほれ月の会釈にひとしくもふけて作る事也発句脇をかろく作りかけて第三字にておもく留へし畢竟もやう也我家にハ曲節の云すてと見るへし

夜くるゝ一とよ去年も当年も

帋衣の味を人は知らすや

恥しう欲こそくもれかゝ美山

又歳旦の三ッ物の第三に

山の井にむかしの霞汲なから

此句山の井といへるは山の井集煙木集なとゝて古抄の名也下の五文字実有汲かへてと有しに歳旦のもやうにわさと汲なからと句作りたる物にして戯れ事也又第三に蟋蟀の法とハ詩経の蟋蟀の定也

啼からに鈴も轡も松むしも

四句目

15オ

15ウ

四句目は一巻のなる処にしてさら里と次の句の附よきやうにする事時宜の一法にして四句目の体と知るへしとかく軽きか能也其故ハ発句脇第三迚ハ様〳〵の法有て発句には切字脇には字留第三て留なとといろ〳〵事多くとかく面白く成もの也四句目ハ始て俳諧の附合なれハ軽きか宜しされとも脇第三の句軽く徒ゝき来る時は四句目をおもくする事も有へし一巻の扱ひなれハ四句目軽きと斗も思ふへからす又いふ発句より四句目迚ハ詩格にいへる起請転合の心得有へし定は又請の心も有へし

筆句

筆句は婦かく念を入て案する事ハせぬ物也徒いへ也筆句の次は筆脇とて第三にも向ふ故其座の老人に功者の人に譲るへし句たけ悪敷時ハ筆句取事あり

挙句

挙句は目出たくさら里と句作る事吾家の常也

面白頬白　目白さへ徒る

硯の海も　春のあけほの

是も挙句の体也

月華

月華は風雅の　り也さのみ珍しき事を好ま須其月其花を趣向として全のたつやうに句作るへし志かるに百韻に四花八月ハ定式といへとも名残の裏の花にさゝハ里てせハしきとて宗祇の頃に勅許あ里て四華七月の式とハなれ里此例をかりて

16オ

16ウ

微細に付る処第一心を尽へし

こしらへる出馬や垣の青ふくへ　橘星

婦くへはなるゝ山雀の旅　廬元

此脇畳字也平句の附合も此様也

立仏蓮華を下りて火燵哉　六芝

鰒のすゝめに入る集銭　廬元

此脇発句ハ立仏か居仏を遣ふといへる俗談に依て大虚の発句也故に其実を以脇の姿を極むる也是を集銭宿と趣向をさたむ是を韻字といふ

也志かるに廬師初の句作り集銭と志たり蓮二師曰いかに集銭宿とはせるやと答曰集銭宿の趣向を立てすゝめに入ると云詞につなきたり我人の句ならハ講一字見ゆへし自己には見へぬ(ママ)処也講の一字ハ脇目井目也と答ふ蓮二曰いとよしとて既に講とは定りたり爰を以門前の講にも相談の場なるへし

」13ウ

瓢から駒も雲井に花火哉

梦の闇に一はけの月

此脇月をせされはなら須されとも月夜に花火ハ面白から須故に梦の闇として一はけの月は瓢から駒も出るといふ画のすかたあれハ一はけ画の会釈たる也蓮二自讃の脇也又曰脇を論するに是等の句にて脇の大意を考へ志るへしと脇は附句より志たしく平生よ里急成かよろし

子も親の上手見ならへ舞ふ雀　左流

名にあふ奈良の芝に鞍艸　廬元

」13オ

此脇よく附たる也

鶯も朝寐恥てや竹の奥

里へすへれは味噌に葱

此脇発句を御所の里おりと見たる也

湖も一夜に門の青田哉

山彦返す入梅晴の霄　廬元

此脇湖も一夜にといふ処を魂と見て山彦返須は韻字ともなり発句への響きともなる也

撞鐘に狂ふや山の盆遊ひ

猿の行荷の月に挑灯

此脇発句を猿と見て挑灯に釣かねの趣向なり是等にて工夫すへし

第三

第三はて留に留覧留の外なし韻字もなし手尓波留なといふは集の模様にして□のこと也外にむつかしき沙汰なし転して外へ及須やうにすへし第三は一転の場なれハ附替さるといふにはあら須俗を雅に内を外へ広きを狭くと転する事也発句脇津ゝきて第三には其事の変化すへきを要とせりとかく発句句の体に紛れさるやうにすへし故にてになとゝかろき手尓波にて留るも変化のためと心得へき也我家に韻字留の名なし第三も脇の意にひとしく趣向慥に立つ時は何にても留へし爰に口□あ里平句の附合ハ打趣(ママ)を転し第三は二句を転するの定也

夕臾の宿は牛の子追歩行

」14ウ

」14オ

といふ御製に心敬僧都の
　水青しきえて幾日の峰の雪
といふ連哥の発句にて考へしと為弁抄に出たり
　鶯や竹の子数に老を啼
　鶯や茶時の山に老を啼
此句等類ならんといふ人もあるへけれと前章は鶯の
老を鳴に竹の子の趣向を立て老を鳴といへ利
後章は鶯の老に茶時を趣向に立たれハ其論なし
姿は格別の違ひ也此類にて等類の沙汰を工夫すへし

　脇

脇に韻字留手尓波留第三の文字留なと習ひ有様
にいふ事世上にあれとも畢竟夫は只集の模様なとに
志たる也脇は発句の余情をひとつとらまへてすへし発句
に云残したる処を脇の趣向とするを韻字とはいへる也
扨てこそ句末に限るへからす只一字二字三字の内に有へし
発句に尽しかたき形容を一二字をもて脇にて定る也
志からハその韻字さへ調ふ時は字留にも限るへから須
されとも常ハ先字留志かるへしよく〳〵工夫すへし
　一とせをきれいに雪の入日哉
此脇山の峰かを句作るへし此句の物に是非山か峰か
有也山か峰かの一字をさため跡は句作也
　卯の花やくらき柳の及出し
此脇江の橋かを趣向とすへしされとも是は脇斗の事
にして平句の附合には此様にもあら須
　荻もきけ萩に難波も伊勢もなし

11オ

11ウ

　出代りの子に母の説法
此脇荻もきけといふ処を見付て意見のこゝろを
趣向とする也此脇節ともいふへき也
　滝の下に葉をかくしてや津ハの花
　名さへ雪見の岩に　観音
此脇滝の下に葉をかさすといふをとかめて観音と
見たる也雪の字にこゝろを尽して滝見の観音と
趣向を定メ雪見といひ替たる処曲ともいはんか
　起婦しの身に羨し水の鴨
　まかれと折れぬ雪の柳の
此脇手尓波也発句の起ふしに水の鴨のとり廻し羨し九
おもふは老人のさま也されハ脇も老人の観相と見て
脇を定むさして字留にてにはの沙汰なし是等ハ一句
の上にて見立る韻字にて手尓波留也
　さそふれあらハと岸の柳哉　　琴左
　旅に参りの笠に糸遊ふ　　廬元
此脇恋のあしらひ也
雑の発句の時は脇も雑たるへし第三よりかなら須
当季を定むへし
脇にも限ら須附合は俗言微中にしてあらくて細かな
類物也加州にて
　稲妻や山も寐させ須明て行　　希因
　月も浅瀬の細ふ片われ　　廬元
此発句は宵より朝まて起て居る姿也浅瀬に細引
て居る人ハ宵より朝迄見て居る姿あれハかく

12オ

12ウ

是と差別のこと也今は切字のなき発句もまゝ有
へし夫は無理を切字を入れて発句の姿を損ふ
ことあるもの也故に切字なくとも発句のすかたあらハ
発句たるへし切字のいらさる発句数多あ里其後
いろ〳〵名を津け玄妙大廻しなといへとも態ともふけて
志たるにはあら須古今抄の伝処此事也又二ッ切字入
発句もあるへし是ハの〻字にて　ゆれハならし

夕皃や炑はいろ〳〵の瓢哉

梅白し白きは神の恵哉

上の切字ハのゝ字にて消す也是にて下の切字活
る也切字はミ那云捨る字也それハ夫是ハこれと
物に差別の字なり

雑発句

雑の発句ハ常にすへから須名所なとにてハ格別
の事也古今抄に此事あ里

哥書よ里も軍書に悲し芳野山　　蓮二

此句右川難して曰下の五文字芳野山には限るへから須
須广の浦とも有へきか蓮二曰須广の浦とハ文なり
芳野山ハ発句也文といひ発句といへる場を考へ知る
へし須广の浦とハ詞ぬるき故抑此須广の浦ハ哥書
よりも軍書に悲しくなとゝ徒くへし芳野山とは
発句の体にして爰に一句の姿をも弁ふへき也

恋追善発句

追善或ハ恋の発句は情より入ること常也其外ハミな
姿より入へし工夫すへし

9オ

9ウ

画讃発句

画讃の発句すこし云残す心得伝拠也画に其事
あれハならし狆の繩を鈴に繋きたる画に

繋るゝ日はいと永し華の留主　　廬元

又茶人の筒花生の銘を書とて工夫し居る図に

華生の名や津く〳〵と園城寺

利休花生に園城寺といふ銘あり

又白鼡の枇杷にとまりたる絵に

鈴なりの枇杷に遊ふや福の神

此句に論あり斯一句は調たれとも画讃の体なくて
たけひくし故に直し侍る

鈴な里の枇杷とよ福の神遊ひ

又越の福井本多修理の扇の絵に炑の野に鬼の
かたちを見へぬやうに出て鐘馗を書たるに讃せよ
とあ里けれハ枳□□の三子も趣向あ里やと問三子とも
趣向出す廬師曰趣向虫狩也と申されし

虫狩や穂かくれすま須きりはたり

又沢に鷺の居る画に

鴫の留主たのまれて淋し炑の暮

鷺をかくしたる也是等の句にて工夫すへし絵に
残すか讃に残すかして余情を持出たる物也

等類

等類と云に心得違ひ有順徳院の

ちくま川春行水は清にけ利

消て幾日の峰の志ら雪

10オ

10ウ

俳諧は俗談平話なれハ姿を先にせされハ理に落へし

上手名人

上手の句ハ手妻にして易し名人の句ハ愚知にして仕立たる時は人も云へく我もすへきやうなれとも其場は学ひかたしたとへハ

塩鯛の歯くきや蔵に梅の花

上手は塩鯛のめてたき処におもひよせて

塩鯛の歯くきも寒し魚の棚

魚の棚の五文字無用の用にして至て愚知也及かたき処なるへし古池も同し事也

枯たハとおもふたに扨むめの華　　徒吾

此句趣向なき発句也趣向なしに作る発句は成りかたき物也夫故常ハ趣向を立てすへし趣向なきハ功者の業なり

道理理屈

発句理屈と道理の論あ里皆句作りの指別也

笑ふたる鬼津れて来ひ花の春

笑ふたる鬼も門まて御慶かな

是等の句作りにて道理と理屈を知へし俗諺に来年のことをいへは鬼か笑ふといふ事を趣向に立たれとも前章ハ情より入るゆへ津れて来ひに理屈有りて全く不道化といふへし後章は同し趣向なから例のをかしきハ勿論にて庵の皮の褌も新らしく咳払ひなとして笑ふたる時を片頬にあやまりて門まて覗たる有様言外の余情にありて

7オ

7ウ

是を我家の風骨とはいへる也されハ心は破るとも姿ハやふらす姿を破らぬはなきものに姿を附るなり心をいふは理也とかく理屈なきを専要とすへし

雅俗　俗中の雅童平のことき覚也

発句より雅俗の按俳有へし雅言津よきは艶にしてぬめ里俗つよきハいやミに落て賤し只〻其加減有へき事也とそ

昼顔に置そふ露や馬の行

此句馬の行とふとき俗なる故置そふ露やと和らきたる也此心得を以雅俗を弁へ志るへし尚付合のくは里にも此事第一なるへし只雅より出たる俗ならては淋から須雅斗にてはぬめ里俗斗にてはするとし俗より出たる雅はよろしから須

温故知新

発句は其物〳〵の風情を有のまゝいひて只一字二字の間にあたらしみ有へし詞は古く心は新しくすへき事発句の第一なるへし是を温故知新の法と云也

折くへて下戸は寒かる紅葉哉　　廬元

橋かけた鵜もにくしわかれ星

前章は下戸は寒かるといふ新しミを得後章はにくしといふ詞に一句を調ふ紅葉も焼も星に鴉の橋も皆〻古きことなからわつかの一二字にて一分の趣向たち発句も処をかゆる也

切字

発句の切字といへるハ無かしの沙汰にして畢竟夫は

8オ

8ウ

六部の鉦に鳴もかんきん

此所戦場の野陣を案すれハ曲か節になる也爰にて
ハ六部の野陣なとゝ見て附たれハ地の附合也

附合節

物くさい雲も晴たる月のかけ

尾華□れに白蔵主まつ

此句物くさひといふ云使をとかめて狐津里と趣向を
立たる処節也物くさひといふ云使に体ある故起
情にはなら須

曲

若ひ大工の恋を病ムける

雨の夜も風ひいた夜も風呂屋町

老の耳に通辞もこまる聞まかひ

南無をみ豆腐待て御木曽

曲は附合にはなし一句の句作に有へし節の心持七名
の起情に似通ふといへとも起情はとかめて起す也節
ハ附合より見出すへし

趣向句作

発句は趣向を立てすへし題に相応の趣向有へし
附合の趣向とハ違ふ也たとへは梅の句なれハ梅は体也
夫に橋にても持て向ふか趣向也跡は句作と心得へし
尤題と趣向とよく繋き合すへし柳の句ならハ柳ハ
体也波は用也趣向なり是に作を津けて

浪にたつ涼しさ持て柳哉　　廬元

趣向と句作と時として心得違ひあ里師曰我一とせ

4ウ　5オ　5ウ

宗祇水の発句を志たるに

風かほる水や宗祇の髭のあと

といへる句也再ひとふに上の五文字趣向たしかに
なら須風薫るハ句作にして趣向にあらす会釈と
いふもの也是等ハ婦たゝひ思ひ返したる風雅の道也
故に藻の一字をもて宗祇水の趣向と須

藻に薫る風や宗祇の髭の跡

姿情の前後

朝臭や魚屋の店も朝の内

此句の評に師曰八百屋にてハなきや魚屋ハ己か理
屈より朝の一字に其情をうつし八百屋ハ青物の
いろより朝露の置わたした類形容をそへて其
すかたを調ふ是を前後の違ひとやいふへけん附合
案方に姿情の前後の大事有りて一足の違ひにて
ならくへ沈む事あ里近き頃の巻に

銭払ひ承りて彦四郎

菖蒲ハよひはつの芋か瀬

此芋か瀬先に胸中にうかまは不成就と志りて早く
捨へし蒟蒻の趣向よりもしや芋か瀬とおもひよ
らハならしされとも菖蒲斗里にてハ彦四郎に寄りなし
芋か瀬は句作にしてこんにやくは繋也爰に姿情の
前後をも考へ心中の大事とハ爰に有へし少の事にて
善となり少の事にて悪と成俳諧の明暗をも恐る
へし心を伝ふとは是等の事にて工夫すへし
連哥ハ悲情なるものなれハ情より入りて理にならひ

6オ　6ウ

万能も只一心のなれの果
前の附句ハ東華坊元禄年中の附合なから西さまの
五文字ハ全く流行にして今も新らし九後の附句は
享保末の附合なから五十年むかしの句振よりハ古し然らハ
不易流行は古今の新古を論するにはあら須不易の地に
流行の曲なるをも志るへし其流行に行過んよ里は戻り
て易き地に遊ふへし

曲節地

むかしハ皮肉骨を以て俳諧をゝしへ中頃は真艸行の
三段をもて導き今は曲節地の三をもて人にに須
艸は曲也行ハ節也真は地なりされハ曲節ハ一句勤て
学ひ易く地ハ百日習ふて得かたし志からハ常に地を
執行（ママ）して其事を学へ或ハ禽獣の風情も或ハ草木の
風姿も森羅万像（ママ）の姿情いさゝかも己の按俳をつくす
其物其侭に云出須を以て俳諧の平生とはいへる也
志かれとも其すかた只情を有の侭に云時は昔咄しの
祖父祖母に等しく例の只云ならんに句作に淋しミ
とをかしミの二つあ里て是をもて夫を津くろひ夫を
もてこれを会釈ふを虚実自在とも千変万化とも
いへる那らし抑趣向斗にて地の附方なきか己か句也
前句よ里出たる句にハ非須前句より出て志かも一句よく
聞へ趣向立てよく附句を地の附かたと志類へし曲節
とハ或は百韻或ハ集俳諧のときもつれたる処も
ほときて津かぬ句をする也是を節とも曲ともいふ
されと附兼るやうに句をするといふにはあら須たとへ

└2ウ

└3オ

ハ逃句走り句たりとも一字あてゝ逃る也

椿のいろをうはふはり物

出代の其日に家の名を附て
此句張物に出代りの趣向ハさ類事なから一句に繋き
なし此附句己か句也前句へ津かす其故ハ附句の趣向
出代りとさためて附たる迫也是にてハ椿にも張物
にも志ほり繋きなし此出代りの人を女と見て椿に
張物の場を庭と見たる是を地の句といふ能付たる
句也其能附たるを有心ともいふへし惣体地は
人の胴より出曲節ハ人の唇より出る也かく地ハなり
かたき物也

地

出代の路次に木履を志から連て
此句張物を雨上りと見て路次の椿の形容より
呵られては句作也

節

出代りもこちの家には伊達過て
此句其庭に木履を志かられてといふ人の様を見出し
いろをうはふといふ処をとかめて其節を附出し伊達
過てとハ二句のてらし合也曲ハ又一段はなれたるもの也

曲

出代里は百人首をも志つて居て
此句一句の上の仕立斗也曲にてハ附こゝろよし

附合地

うつとしひ（ママ）雲もはれたる月の影

└3ウ

└4オ

俳諧獅子門聞書

獅子門
俳諧聞書

不易流行　曲節地　趣向句作
姿情前後　上手名人　道理〻屈
雅俗　温故知新　切字
雑発句　恋追善句　画讃発句
等類　脇　第三
四句目　筆句　挙句
月華　附句　七名八体
延句別名　繋志ほ里　虚実
死活　見聞之法　二句一意
畳字畳語　飜転之法　附句二句之姿
附不附論　句之変化　前句のこなし
無用之用　三段案様　三句之味合

1オ

表紙

撰集之句　前句一字附　平句哉留
季移　恋句　旅句
尓留　表句裏句　素春素秋
撰集　附合雑話　会式執筆
文法　点式

不易流行

不易流行は俳諧の両翼にして何連かかたつ〳〵ならん
きのふ不易を捨てけふの流行に遊ハんにはけふの流
行ハ明日又古からん流行〳〵と云て其流行の果は
いかん夫らは小哥浄留理(マヽ)の沙汰にして曽て我
家の論にはあら須

不易

古池や蛙飛こむ水の音

不易にして地也

御命講や油のやうな酒五升

景清も華見の座てハ七兵衛

流行にして曲也

前の古池ハ世に人の志れる故翁の絶章にして姿情
の前後も明らかに後の七兵衛ハ其座に一興の詞の花とも
云なるへし志からハ後章ハ五十年むかしも流行にして
前章は百世の後も不易ならむ又附句の不易流行ハ

船場あかれは鴫の□脛

西さまと知らて江口の炑志くれ

不易

腰かけさせて茶漬振廻ふ

1ウ

2オ

『俳諧獅〻門聞書』（解説と翻刻）

小瀬渺美

Haikai S'hishimon-Kikigaki : Introduction and its Reproduced Text

Hiromi Kose

解説

外題に「俳諧獅〻門聞書」とある本書は、写本で伝わったと思われる俳諧者の心得と作法を説いたもので、本文冒頭には「獅子門俳諧聞書」とある。

体裁は半本紙（21.8×14.7センチ）。稿本一冊。表紙は灰黒色、花模様を浮かした厚紙、絹糸綴。本文は目次とも四十五丁。岐阜県立図書館蔵。

内容は「不易流行」「曲節地」「趣向句作」「姿情前後」など五十項目にわたって俳諧の心がまえ、作法、句座における執筆・連衆の心得などを説いたもので、支考・廬元坊などの作品や発言も引用しながら論じた獅子門俳論の五竹坊からの聞き書きである。

本書の成立及び筆者については詳細未詳である。しかし、本書には同筆とみられる同名の「俳諧獅〻門聞書」の別本があり、その冒頭に「五竹坊獅子庵聞書略」の語がみられ、またその別本本文中に

「此書は句評と題して五竹師行脚のミき里文政七申の春日模写するもの也いまだ是に倍する書なから過し年写し置ける獅〻門聞書に載る所ハのそきて記さす」

とあり、このことから、別本は文政七年春頃の手写とみられる。そこに「過し年写と置ける獅〻門聞書に載る所ハのそきて記さす」の語があるところから、以下紹介する本文は、文政七年（一八二四）よりさほどさかのぼらない年代に、五竹坊門下の俳人によって手写されたものと考えられる。ただし、別本中に「五竹師行脚のミき里」とあり、五竹坊の没年が安永八年（一七七九）であることから、紹介原本成立の時期を推定することができそうである。

獅子門は、蕉門屈指の俳論家である各務支考によって拡められた俳諧の流派で、支考が美濃国山県郡北野（現岐阜市）の生まれであること、主として美濃を中心に活動したことなどから「美濃派」とも呼ばれる。

俳風は俗語や日常語をもとり入れた平明、平易で、理解しやすく、支考以下の道統の行脚教宣もあって、美濃地方を中心にその勢力は北陸、東北、中国、九州にまで及んだ。

美濃派は芭蕉（元禄七・一六九四年没）を第一世とし、以下二世支考（享保十六・一七三一年没）、三世仙石廬元坊（延享四・一七四七年没）、四世五竹坊（安永八・一七七九年没）と道統が継がれ、五竹坊死後、再和派、以哉派に分派したが、戦後再び統合して現在に至っている。

凡例

一、丁数は各丁表・裏の最後の行の下に、「一丁表を」オ、「一丁裏を」ウのように丁替わりを示した。

一、各行の字数は二十字から二十五字前後にわたるが、原本の字数どおりに示した。

一、句読点、濁点は加筆せず、原本に従い、不明箇所は□で示した。

一、文字の表記は原則として原本どおりとし、文字及び仮名遣いの誤りについては該当箇所右側に（ママ）を付して示した。